

ふれあいの森のナラ枯れ対策

はじめに

ナラ枯れは古くから見られる現象だが、特に1980年代以降日本各地でナラ類等の大量枯死が発生しており、堺市内でも昨年あたりから被害が目立つようになってきた。

この枯死の原因となっているのがカシノナガキクイムシだ。体長5mmほどの円筒形の甲虫が木の中に坑道を掘り子育てする。メスの体には菌（ナラ菌と酵母菌）を保持する特殊な器官があり、坑道の壁で育てた菌が幼虫たちのエサになる。樹木の辺材に坑道が延びることにより、根から吸い上げられる養分の通り道がふさがれ樹木が枯死する。ただし侵入木のすべてが枯死するのではなく、コナラでは3割程度だと言われている。

被害を受けやすい森は、比較的高齢で大径木の多い薪炭林とされており、手入れされず放置された里山の増加が、被害の拡大につながっていると言われている。



カシノナガキクイムシ 上がオス、下がメス

一つがいで400匹以上の子育て

カシノナガキクイムシの雌には貯精嚢があり一度の交尾で足りる。まず4個の卵を産み、そこから孵化した幼虫たちは、分岐坑を掘り適度な水分が保てる場所で酵母作りを始めます。その酵母菌を食べた雌成虫は卵巣を発達させ2週間後には20個の卵を産む。最初に産まれた幼虫は、おかあさんが産んだ卵から孵化してくる幼虫が、すぐに食べ物にありつけるように良い場所に運搬したり逆に酵母を運んだり世話をする。さらに雌成虫は酵母を食べる卵巣に栄養を送り込み、今度は50個

単位での産卵を繰り返し変えて合計400匹以上の子どもを群れで協力して育て上げます。こうして先に産まれた幼虫が、後から産まれた弟妹のめんどうを見ることによって多くの数の子育てを可能にしている。

成虫は交尾後脚がとれてしまい、雄成虫は穿入してきた入口にいて敵の侵入を阻んだり、換気をしたり、新しく生まれた成虫の出巢調節などの役割を担う。

ふれあいの森でのナラ枯れ状況

ふれあいの森の中の園路沿いでカシノナガキクイムシに侵入された樹木を調べたところ、平成29年9月14日現在で35本のコナラの侵入木が確認されました。そのうち枯死したのは1本だった。

来園者に安全なふれあいの森での利用を提供できるよう、侵入木の変化の状況や、落枝や倒木の危険性の有無などのチェックを続けている。また森の館や木道付近のコナラに対して、カシノナガキクイムシの侵入を防ぐため2mmメッシュの白い網を2重に巻いている。一度放置された里山環境を復元する過程でカシノナガキクイムシの侵入は避けられない試練ではないかと思われる。



堺自然ふれあいの森
館長 後北 峰之